

ロマン派詩人 G. G. Byron の逸脱と変容 — 『醜男変身譚』 の比較分析 —

L12R541 良田玲子

論文要旨

はじめに

詩劇 *The Deformed Transformed* (1824, 拙訳タイトル『醜男変身譚』) は、英国のロマン派詩人バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の短い生涯における最晩年の未完の作品である。本論文は、もともと、この一風変わった作品名に疑問を抱いたことに端を発する。このような主人公の身体特徴を露骨に明示した題名がいかにも 19 世紀の初頭であるとはいえ、ロマン派の作品の題名として腑に落ちなかったのである。確かに日本にも『一寸法師』と題する出世物語はある。しかしそれは今から 7 世紀も昔のお伽噺である。18 世紀の啓蒙主義、アメリカ独立戦争、あるいはフランス大革命を経て、自由、平等、人権を重視するようになった時代に、なぜこのような題名の作品が書かれたのであろうか。本論文は、この問題を解くために、次のような作業仮説を設定し、論証を試みたものである。すなわち、この作品には、醜い姿形を持って生まれた下層の人間でも、魔術により変身すれば、アキレスのような英雄にもなれるとする一種のお伽噺らしきものが描かれている。これは今日の社会にも通じる倫理的な問題を孕んだ話である。今日では、体細胞から分化万能性をもった細胞を人工的に作成して再生医療に応用することが夢ではなくなり、様々な倫理的な課題が浮上しているからである。バイロン自身は、近代科学批判のプロパガンダ小説とも言われる『フランケンシュタイン』を書いたメアリー・シェリー達と親しく執筆活動をしながら、表面上はこうした科学技術の進歩のあり方に関して立ち入った発言をしていない。しかし、この作品が未完に終わっていることは、変身の是非の問題がバイロンにとって解答の出し難い難問であり、重要な課題であったことを示唆している。彼は、解答を出す代わりに、*The Deformed Transformed* と名付けたゴシック・ストーリーの形を借りて読者がこの問題の解決に参加することを促していると思われる。すなわち、ゴシック・ストーリーとは定説にあるように結婚前の婦女子の為の戯作である以前に、政治的・科学的主張を盛り込むことのできるジャン

ルなのである。ゴシック・ストーリーは言論が自由な時代になるとともに、写実主義文学に道を譲り、時には心理主義小説の立場から厳しい批判を受けながらも、英国風の語り物文芸の伝統を継承し、推理小説へと発展する。ゴシック・ストーリーは文学の本流を形成する作品群の一つとは認められてこなかったが、この作品を上述したようにゴシック・ストーリーの一種であり、政治的主張が込められていると読み解くならば、シュールリアリスト達の称賛に続いてゴシックを枠組みが再編成された文学—伝統的文学の一つとする道が開けるのではないかというのが本論の仮定である。これを証することによって、バイロンがこの奇妙なタイトルを選んだ理由も推測できるはずである。今のところ、この作品の日本語訳は、論者の拙訳しか公刊されていない。題名については、従来、『不具の変身者』や『片輪者の変身』などと訳されている。本論では拙訳で採用した『醜男変身譚』を用いている。「シコオ・ヘンシントン」と読む。シコオとは単に醜男という意味だけではなく、四股を踏む力士や仁王のように力に溢れ、周囲を恐れさせるという意味も籠められている。以下、順番に本論文の各章の概要を説明したい。

序論 — 詩人バイロンについて

ジョージ・ゴードン・バイロンは英国後期ロマン派の代表的詩人の一人である。貴族に生まれ、自由を求め、私財を投げ打ち私兵を率いて、オスマン帝国からの独立をめざすギリシアの独立戦争を支援する軍事作戦に従事する間に病死した。情熱と行動の武人であり、文士である。我が国でも建国期の明治から第二次世界大戦中までは特にもてはやされた。英文学史では、正典的な詩人の一人という評価が定まっている。そのためか、20世紀後半から始まった文学史上の正典作家批判の中であって、彼の作品のテキストは読み直されて再評価される文学テキスト群の中に位置づけられることは、まったくといってよいほどなかった。それどころか、ロマン派詩人であるにもかかわらず、Alexander Pope(1688-1744)のような新古典派詩人に傾倒した詩人として、その思想的立場に不確かな点があると見なされ、軽んじられもした。その作風はThomas Carlyle(1795-1881)によって、激情的で劇場的、非生産的な自己破滅型と揶揄された。

本論文では、このような従来のバイロン解釈を踏まえて、この詩劇『醜男変身譚』を現代の大衆小説やサイエンス・フィクションにも通じるゴシック・ストーリーとして読み直す。すなわち英国ロマン派第二期を代表する正典的な詩人の一人というバイロンの側面に加えて、

ゴシック・ストーリーを戦略的に援用することにより、それまでの伝統文学から逸脱しようとした側面もバイロンにあるということを論証する。この著者自身の逸脱行為を自己諧謔的に使って、バイロンはゴシック・ストーリーの正典化を狙っている。そのためにバイロンは生まれ育った社会から逸脱せざるを得ない人物を設定した。本論文ではまた、そうした登場人物の日常生活から「逸脱」し、あるいは「変容」していると思われる二つの事例を重点的に検討する。すなわち主人公の変身願望と主人公の擬似英雄的な性格である。主人公の変身願望については、変身 (transformation) とは何か、具体的方法、その意義について、著者にとってのみならず、社会的、倫理的に是認し得るのかという問題を設定して論じる。主人公の擬似英雄的な性格については、ホメロスの半人的英雄からの変遷、拡大 (社会を指導し、変化させる人物)、および縮小 (物語の主人公、私小説の語り手) をこうむった hero という英単語のもつ意味の歴史をたどり、変身を必要としたアーノルドを使って、現状変更に挑戦したバイロンの意図を明らかにする。

第一章 一歴史的背景とバイロンの生い立ち

1.1. バイロンの生い立ち—では、詩人の伝記によってバイロンの家系に由来する彼自身のゴシック的傾向とゴシック・ストーリーとの運命的出会いを論じる。現英王国の歴史の始まりとされる 1066 年のノルマン・コンクエスト以前からのノルマン王朝の家臣であったバイロン男爵家は武勇の誉れは高かったが、経済的には生産的でなく、往々にして女系からの資産移入に頼っていた。ゴシック・ストーリーは、家庭内と家系内の暴力的相続の歴史や王位篡奪を好んで語る傾向があり、ここではバイロンの生涯とこのジャンルとの近似性を検討する。

1.2. 歴史的背景—では、『醜男変身譚』が執筆された 18～19 世紀初頭の社会状況が当然要求した客観的歴史記述とそれまでの歴史記述の歴史を辿り、18 世紀の啓蒙主義の時代が歴史の再検証の時代でもあったことを論じ、バイロンの愛蔵書の一つ Francesco Guicciardini (1483-1540) の *Istoria d' italia* (1537-40) の位置づけを図る。その上で、この時代に現れたゴシック・ストーリーが王朝の正統性を論じることの可能な歴史記述の一手段であった仮説を提示し、バイロンもまたこれに関心を持ったことを確認する。

第二章 一『醜男変身譚』におけるリチャード三世コンプレックス：

ロマン派の歴史再評価とその手段としての文学作品

2.1. 作品のタイトルについて—では、タイトル中のDeformやTransformといった言葉の持つ禁忌性をあえてバイロンが使用した理由をGeorge Wilson Knight (1897-1985)の*Byron and Shakespeare*. を参考にして考察する。バイロンはシェイクスピアの造形した有名な身体不自由・性格偏向の王リチャード三世と自身を往々にして同一視し、また周囲からされていた。同じく『醜男変身譚』の主人公アーノルドは‘せむし’であり‘びっこ’ⁱで、生みの親からも疎まれる存在であったとして、シェイクスピアのリチャード三世とバイロンとアーノルド三者の共通性を明らかにし、バイロンの友人宛て書簡から、彼がシェイクスピアへの異議申し立て(an official objection)を企てたと提起する。

2.2. リチャード三世伝説へのバイロンの疑問—では、前節を受けて、バイロン自身の体験から、外観から性格や行状を決めつける周囲への反発が、大詩人シェイクスピアに対してさえもバイロンにあえて挑戦させたことを、詩人自身の言葉やその家族や友人の書簡・日誌を用いて検討する。ⁱⁱ

2.3. リチャード三世像の歴史的変遷の概観—では、今や定説になっているシェイクスピアの『リチャード三世』がチューダー朝のプロパガンダ劇であることを検討する。この伝説の創造者とされる16世紀のThomas More (1478-1535)に疑義を呈した歴史家・研究者の中でSir George Buckの*History of the Life and Reign of Richard the Third* (1649)の送付を依頼するバイロンの書簡が残っている。また彼が書簡中で引用しているHorace Walpoleの*Historic Doubts on the Life and Reign of King Richard the Third* (1768)は当時の英国での歴史問題討論を盛んにした。こうした伝説擁護派と伝説懐疑派の対立をたどり、この論争が如何に当時勃興したロマン派の文学運動に最もふさわしいものの一つであったかを説明する。ウォルポールがこの政治的歴史書を発表したのはゴシック・ストーリー *The Castle of Otranto* (1764)の成功の四年後であった。即ちフィクションが理論に先駆けてファンタジーとして発表されている。これは革命的理論を穏やかに発表できる一手段であった。バイロンはこの論文にその書簡中で言及している。ⁱⁱⁱ

2.4. バイロンとシェイクスピア：リチャード三世をめぐる—では、バイロンのシェイクスピア受容の態度を彼自身の書簡と日誌集からのデータを活用して検討する。彼はシェイクスピアを幼少より愛読し、それらの登場人物像をも含めて如何様にも変容できるまでになっていた。また、バイロンがシェイクスピアの作品中で最も愛好したのがリチャード三世の人物像であり、それを演じた当時の俳優Edmond Kean (1789-1833)を支援した。その結果、バイロンの演劇論はシェイクスピアをも通越したパースペクティブを持つこととなった。変容は人物の外観だけでなく、作品相互でも行われることであり、今で言うところの転用の

中で新しい生命を得ることから、永遠の大天才などは存在しないと喝破して^{iv}、シェイクスピアに挑戦状を突きつける心構えがバイロンにはできていたと言える。これはバイロン研究の第一人者の一人Ann Bartonの*Byron and Shakespeare*にも見ることができる。

2.5. ボズワース戦場に関する若書き—では、そうしたバイロンの批判的態度の一方で、彼は19歳の折の書簡にリチャード三世最後の戦場ボズワースをテーマにした詩を書いていると友人に報告している^v。現在その詩が発見されていないことから、その若書きは15年の年を経て*The Deformed Transformed*に変容・結実したのではないかと推測されうる。ゴシック・ストーリーはウオルポールの『オトランド城』を元祖とするのが一般的であったが、後にゴシック小説が文学史上認められるようになると、幽霊や戦士の登場する『ハムレット』や『マクベス』を書いたシェイクスピアもゴシック・ストーリーの作者と見なされるようになった。これらから、バイロンが『リチャード三世』を特に愛好していた事実を踏まえ、ゴシック・ストーリーのジャンルが伝統的な権威に対して異議申し立てを目論んだ可能性があり、バイロンも又そうした討論に参加する意欲を持ったと言えるもう一つの証拠である。またバイロンは2.4.にもみられたように、著作権以後の社会、現代のサイバー社会での創作倫理にまで思いを至していた可能性がある。

第三章 — バイロンのファッション・ショウ

3.1. 外様形成の自由について—では、第三章を、アーノルド達身体に障害を持った者の憧れ、変容を歴史的に捉えんとする。この作品のテーマの一つ、変容は神話の時代からの古いテーマであるだけでなく、近代に入って産業革命と共に人間の欲望を現実化する最も過激・有効な概念としてtransformationの語彙がラテン語起源としてchange shapeとは別に現れたことを指摘する。それはメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』に見られるように、人造人間の試みであり、唯一の創造者たる神への反逆でもあったが、この探求は21世紀の現代にまで引き継がれている重要なテーマであり、シェリー等とは異なりバイロンはこれをシニカルにコミカルに扱っている点が特異である。

3.2. 自由の根拠：ヨハン・カスパー・ラファーターの観相学—では、バイロン達ロマン派の作家が上記のように「新しい人間」は段階的・部分的に考察されて創造することができると考えたのには科学的な知識の裏づけがあったことを論じる。そうしたものとして、チャールズ・ダーウィンの進化論の他に、観相学・骨相学がある。バイロンの蔵書目録にはJoan Caspar Lavater (1741-1801) の*Essays on Physiognomy: For the Promotion of the Knowledge*

and the Love of Mankind (1775-1778) 1789年英語版が存在し、バイロンが外観に関心を有していたことが窺われる。この『観相学断片』を参照しながら当時の文学の実作品を鑑賞して、写実主義文学もこの理論無しには生まれなかったのではないかと推論し、これら一群の活動が20世紀末の Barbara Maria Stafford (1941-) の身体論としての著書 *Body Criticism: Imaging the Unseen in Enlightenment Art and Medicine*. (1991) にも繋がるとする。

3.3. バイロンのファッション・ショー—では、アーノルドがもう一人の中心人物 *Stranger* の力を借りて、神話的英雄アキレスの外観を選ぶ箇所にラファーターの理論が使われているとして精読する。一方で、“Close thy Byron; Open thy Goethe”（「汝のバイロンの書物を閉じ、ゲーテのそれを繙け」）と言って外観を別の側面から捉えたカーライルの『衣装哲学』(*Sartor Resartus*, 1836) を参照し、生真面目に考えれば閉塞する人生を変容と逸脱で乗り切ろうとする『醜男変身譚』の庶民性を強調する。また Percy Bysshe Shelley の *Oedipus Tyrannus; or, Swellfoot The Tyrant* (1820) とも比較し、『醜男変身譚』がその直後登場するフロイト理論からも独立しているとする。すなわち『醜男変身譚』はゲーテの『ファウスト』との近似性はあるにしても、ゲーテ自身が認めるようにバイロン独自のものであり、アーノルドが魂と交換してでも欲しいものは、ファウストのように神にも近づく叡智ではなく、視覚を重んじ、他人から見た自分の重要性、人間間の価値に目を向けたと言うことが証明される。

3.4. ショウの果てに：変身の効果と平凡の幸福—では、外様形成の自由と幸福との関係について考察する。それにより、人間の価値を外観で判断することが出来るかどうかの問題、あるいは外観を人間の価値判断の基準とする傾向があった時代とはどのような思想の支配する時代であったのかという問題について省察する。『醜男変身譚』第三部を引用して、この作品がまじめでありながら、笑いを以って人生の困難に耐え、楽しみ味わってこそ生き甲斐とし、人間の分を守ることが重要と言う結論に達しているとして、神とは別に社会的存在としての人間に目を向けた今日の世俗的人間としてのバイロンを読み取る。こうした彼の姿勢はバイロンの他の作品と比しても特異である。

第四章 — 変身譚と擬似英雄詩の系譜における『醜男変身譚』

4.1. オウィディウスの『変身譚』は擬似英雄詩か。—では、まず擬似英雄詩とはどのようなものであるかを定義する為に、バイロンの愛読したギリシア詩中の白眉であり、アキレスの活躍を描き、かつ変身をテーマとしたオウィディウスとバイロンの作詩上の共通点を Alexander Pope の英訳 *The Iliad of Homer* (1715-20) や *The Odyssey of Homer* (1726) を用い

て求める。またバイロンの友人の記録から、両者は自らの原稿を燃やすという奇行を残し^{vi}、双方愛の詩人とも呼ばれたが同時に政治的意図を持ち、叙事詩や英雄詩にも関心を有していたと思われる点を考察する。

4.2. イタリア戦争とトロイ戦争を反映する『醜男変身譚』は疑似英雄詩と呼びうるか。—では、イタリア戦争（1527年）とトロイ戦争の共通点を把握しながら、同時にイタリア戦争が如何に近代的なものであり、既に時は英雄を騎士に代表される貴族階級にのみ求めず、庶民の勃興を許していたこと明らかにする。又フランチェスコ・グイッチャルディーニの『イタリア史』を参照して、*The Deformed Transformed* 中の一大イベント「ローマの略奪」のこの作品における必要性を論じる。また『イリアス』第一連を引用してホメロスの英雄も英雄でなければ、幸福な家庭人たることを願ったであろうと推論する。

4.3. バイロンが Mock したものは何か、なぜそうしたのか。それらの異同は意図的なものか。疑似英雄詩の形式は必要であったのか。—では、以上の分析によって一方にフランス大革命を置くバイロンの時代に、hero が庶民であることは、直接的に英雄として語るよりも疑似英雄詩として語る方が効果的であり、詩人にとっても安全であるとして、バイロンの隠れた意図が存在したことを示唆する。

結論—では、バイロンが「俊足のアキレス」をアーノルドに選ばせたのではなく、平凡な幸せを選ぼうとして失敗した男を描いたのだとし、かつそうした失敗こそは人間の証であるとする。このようにこの詩劇が、遍歴する騎士の物語の形式を借りた一種のゴシック・ストーリーであることを論証し、さらには、他の騎士物語と比較しながら、『醜男変身譚』を疑似歴史小説あるいは「往時の物語」の形式をとった正史批判の物語あるいは体制批判の物語として読めるかどうかを検討する。^{vii}

第五章 — ジョシュア・ピカーギル著『三人兄弟』との比較

5.1. ピカーギルと『三人兄弟』(*The Three Brothers*, 1803) に関する概要—では、バイロン自らが作品の冒頭で影響を受けたとする『三人兄弟』をオックスフォード蔵書のマイクロ資料によって読む。叙事詩の構成を模し、ゴシック・ストーリーの内容を有するが、テンポは散漫である。また、著者 Joshua Pickersgill (1780?-1818?) に関しては現在知られる限りはほとんど無名の作家であって、バイロンが献辞をささげる理由をここでは検証する。

5.2. バイロンとピカーギルの『三人兄弟』との接点—では、傑作とは言い難い『三人兄弟』とバイロンとの関係を探る為、①バイロンの蔵書目録 ②バイロンの書簡及び日誌 ③

オックスフォード版バイロン作品集の INDEX や Marchand 版の書簡集 ④バイロンの友人知人の書簡集などの記録を調べたが、確たる証拠は見出せなかったことに関する推論を述べる。

5.3. バイロンとピカーギルの時代と文学的環境—では、gothic story や gothic romance あるいは gothic novel も *The Oxford English Dictionary* には収録されていないことを指摘する。他方、deformity, transform, change 及び metamorphoses はそれぞれの項目中に多くの実例と共に各語の意味内容の変遷が詳述されていることを指摘する。Deformity と transform は 13 世紀以前の英語には見当たらず、15 世紀以降多用されるようになった。OED における実例を参照しながら、ゴシック・ストーリー成立時の transform 「変容」の概念の受容を見、それらがプラスイメージに転換されるのは Charles Robert Darwin (1809-1882) の『進化論』としての代表作 *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life* (1859) 出版以後であり、バイロンはこれを先取りしているとする。

5.4. 『三人兄弟』とバイロンの『醜男変身譚』の類似性と異質性—では、旅の目的、怒りと嫉妬、変身の報酬、名前の相似形、変身の役割、変身の対象、作品形態、Deformity の評価、変身の方法等をめぐって二作品を比較対照し、hero の語彙の変遷に関しても OED で確認する。『醜男変身譚』における hero は、A name given (as in Homer) to men of superhuman strength, courage, or ability, favoured by the gods; at a later time regarded as intermediate between gods and men, and immortal ではなく、1586 年初出の第二義、A man distinguished by extraordinary valour and martial achievements; one who does brave or noble deeds; an illustrious warrior を超えて、1661 年初出の第三義 A man who exhibits extraordinary bravery, firmness, fortitude, or greatness of soul, in any course of action, or in connection with any pursuit, work, or enterprise; an man admired and venerated for his achievements and noble qualities と人間の証しである魂を持つようになり、仲間内から自らの業績で称賛されるようになる。1697 年初出の 17 世紀以降の第四義ではついに、The man who forms the subject of an epic; the chief male personage in a poem, play, or story; he in whom the interest of the story or plot is centered となって、まさに平民アーノルドと身元不明人あるいは悪魔のストレンジャーはこの範疇に入ることが分かり、バイロンの語彙使用の新しさが窺える。

結論—では、両者が主筋において類似していること、しかし主人公の家柄や幸福観では異なっており、ファウスト伝説とも異質であるが、双方、ゴシックと認められると論じる。しかし『醜男変身譚』の主人公が、騎士を主人公とする多くのゴシック・ストーリーとは異なり、平民であることにこの作品の独創性が窺われ、そのことが結果として近代写実主義文学に通じており、ファンタジーの形式をとっているのは Tzvean Todorov の *Introducion a la*

literature Fantastique (1970) によって政治的意図の隠れ蓑であると論証する。

第六章 — ゴシック・ストーリーとしての『醜男変身譚』

6.1. ゴシック・ヒーローとは何か—では、Peter L. Thorslev Jr.の *The Byronic Hero* (1962) によって Charlotte Brontë (1816-1855)の *Jane Eyre* (1847)や Emily Brontë (1818-1848)の *Wuthering Heights* (1847)の男性登場人物のバイロニック・ヒーロー振りを分析する。また Sandra Gilbert と Susan Gubar の *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (1979) や Ann Williams の *Art of Darkness: A Poetics of Gothic* (1995) によって、ゴシック・ストーリーが女性の相続財産に対する男性の侵害、王位篡奪者の話であるとして、バイロン自身の生涯や『醜男変身譚』の構造がそれに当てはまるかを検討する足掛かりを提出する。

6.2. ゲーテの『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』^{viii} およびウオルポールの『オトランド城』との比較—では、ドイツ恐怖小説とゴシック・ストーリーはあい携えて、このジャンルの発展を促したことを指摘する。さらに、両者の代表作品Johann Wolfgang von Goethe の *Götz von Berlichingen mit der Eisernen Hand* (1773) と『オトランド城』の比較対象を行うと共に、このジャンルが文学史上に位置づけられていたように婦女子用書物ではなく、男性の読み物であったことを、1800年当時のドイツのヴュルツブルク市図書館の記録から推量できる。これによって、ゴシック・ストーリーが政治・経済に関心を持つ読者の為のものであるとする。

6.3. 『マンフレッド』および『シオンの囚人』と『醜男変身譚』の比較—では、バイロンのゴシック作品とされる *The Prisoner of Chillon* (1816)と *Manfred* (1817)を『醜男変身譚』と比較検討して、三者ともにゴシック作品とみなし得ることを強調する。

6.4. 『醜男変身譚』のゴシック・ストーリー的結末—では、Edmond Burkeの *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1757) を援用してゴシック・ストーリーを定義することを試みた小池滋の説^{ix}に基づき、『醜男変身譚』が典型的な暗黒のゴシック・ストーリーであることを論証する。また、変身による階級からの逸脱をはかったこの作品の主人公アーノルドが当時の読者に与えたであろう恐怖の性格について、William Beckford (1760-1844) の *Vathek, an Arabian Tale*, (1782 in French, 1786 in English) や Matthew Gregory Lewis (1775-1818) の *The Monk* (1796), Charles Brockden Brown (1771-1810)の *Wieland; or, the Secret Witness* (1798), Ann Radcliffe (1764-1823)の *The*

Mysteries of Udolpho (1794), Jan Potocki (1761-1815) の *Manuscript found in Saragossa*, (1804~5), Charles Robert Maturin (1782-1824) の *Melmoth, The Wanderer* (1820) 等も参照すると、身分だけでなく、救出された姫君の方が勇士アーノルドを恐れさせ悩ませて性差をも転倒している『醜男変身譚』は、他の作品と共に暗黒のゴシック・ストーリーと呼ぶことができる。

結論

『醜男変身譚』はシェイクスピアの『リチャード三世』に代表される様々な逸脱と変容をテーマとした先行作品を受けた一種のゴシック・ストーリーとして読むことができる。そこには、ドイツ農民戦争、イタリア戦争、あるいはフランス革命の後のヨーロッパの混乱した複雑な世相が反映している。バイロンはいわゆる高踏派の文学にだけ関心を持っていたわけではなく、ゴシック物にも手を染めた作家なのである。純文学としての詩や小説や劇を意味する狭義の文学と言う概念は19世紀後半に広まったものであると言われている。文学を意味する英仏語の *literature* あるいは *littérature* はその語源 *literate* と共に、長年にわたり、文献、優れた書き物、あるいは学識といった意味で用いられてきたとされている。その意味でも、優れたゴシック・ストーリーは決して文学の鬼子ではなく、文学の本流になりえた可能性があったのだが、狭義の文学という概念が成立して以降、ゴシック・ストーリーは史実以前のお伽噺としてシュールリアリストがこれを称賛するまで軽んじられることになる。しかし、史実としては語り難い実話をフィクションとしてなら物語ることが出来るところに文学の力があるはずである。これを蔑にするならば、21世紀における文学の未来は暗いことになる。文学の領域を回復し、広げてゴシック・ストーリーを文学として評価する動向は20世紀末になって始まったものである。往年の力を失って久しい文学の復権を目指す者にとって、このジャンルに属する作品の主人公の多くがバイロニック・ヒーローであることは示唆に富んでいると思われる。*The Deformed Transformed* という主人公アーノルドの変身を示すこの作品の題名は、拙論「はじめに」で提示したように一見は不可解であるが、神の被造物としての人間の創造や改造をタブー視するキリスト教に対する異議や、文学における一方的なシェイクスピア信仰への疑義を申し立てるのみならず、これまで語られてきた国家の正史や近代科学、近代産業主義に対する異議申し立てを示唆しており、当を得て妙である。すなわち、バイロンは単に近代科学や宗教を否定しているのではなく、変容を時間とのバランスの問題だと考えていた。醜い姿形を人為的に変容させる行為は、時代あるいはそのスピードによって禍と

も福とも解釈し得る。また、外観上の醜さとは、階級の低さの別の表現でもありうる。そのような差別的視点を取り去った時、人間は次に何を手がかりとして吉兆、幸・不幸を占うのか、バイロンは答えを出すのに窮したはずである。その他のゴシック・ストーリーのようにハッピーエンドにしたり、哀感的英雄譚として終わらせたりせずに、ドラマとして『醜男変身譚』を未完のままに世を去ったバイロンは、その解釈を読者各個人に委ねていると思われる。その意味では、この詩劇はゴシック・ストーリーからさえも逸脱して 21 世紀の文学の地平を見晴らす。すなわち近代化の成果の一つとして 19 世紀後半以降発生した‘文学’の範疇から逸脱しているのである。かくして、『醜男変身譚』は、変身の結果を占う、本格派以上に社会派推理小説になる筈であったオープンエンドのゴシック・ストーリーと言えるだろう。

i この作品中には現代では一部問題となる表現がありますが、当時の用語と翻訳を基に分析する為、そのままの形、または原語の意味するところに近い翻訳を使用しています。

ii *Letters and Journals of Lord Byron: with Notices of His Life.* 2 vols. Thomas Moore. 1830. Quoted in the introduction to *The Deformed Transformed. Oxford edition Collection of the works of Byron.* 1991.

iii *The Works of Lord Byron, Letters & Journals,* vol.IV. London:J. Murray, 1976. p.206.

iv *Byron's Letters and Journals,* Vol.4.Ed.L.A.Marchand. London:J. Murray. 1975. pp.84-5.

v *Byron's Letters and Journals,* Vol.1.Ed.L.A. Marchand. London:J. Murray. 1974 . p.136.

vi Jerome McGann. Commentary to Byron's *The Deformed Transformed.* Lord Byron The Complete Poetical Works. Vol. VI. 1991. Oxford; Oxford U.P. reprint 2000. pp.725-6

vii 石川實「ドイツ恐怖小説とゴシック小説」『城と眩暈』 pp.223-224 で石川は「ゴシック小説が「疑似歴史小説」と銘打ったために、物語の展開される時代の歴史的特性に無関心で、十字軍の時代であろうと農民戦争の時代であろうと、一様に漠然と過去の時代としてコスチュームプレーを展開した」としているが、このような作品は特に中期には多く見られるとしても、『オトランド城』などは、反対に明確な歴史認識のもとに作品の時代設定を曖昧にしていると思われる。

viii ゲーテ、J.W. 「ゲッツ・フォン・ゲルリヒンゲン」中田美樹訳『ゲーテ全集4』東京：潮出版社、1979年。

ix 小池滋『ゴシック小説をよむ』東京：岩波書店、1999年。